

今年度の統一テーマである「他文化・他思想との交流」という視点から日本における仏教定着の特徴を考察する。

いわゆる、鎌倉仏教の祖師と称される人々は、共通して末法という歴史意識を持っている。我が国への仏教伝来は、『日本書紀』によれば欽明天皇 13 年 (552) とされる。この『日本書紀』の記述については様々な解釈があつて最初から末法を意識したものではないという意見もあるが、最澄撰述とされる『末法燈明記』(9 世紀初め) の出現などによって 552 年が末法初年と自覚されたことは否定できない。それ故、日本の仏教定着は末法思想の受容に伴って発展したものであると言える。そしてこのような歴史観は、結局、中国・朝鮮半島には根付くことがなかった。また、仏教の伝来については「善光寺如来」の説話も看過することができない。善光寺如来は、インド・百済・日本の三国伝来とされたのであり、それはこの時代の仏教的世界観を表していると言える。最澄などは明確にインド・中国・日本という仏教の流伝を意識しており、両者の間には世界観の転換があると言える。さらに平安中期になると、三国伝来と末法意識が重なり、特徴的な歴史観が生まれた。それを源為憲『三宝絵』に見ることができる。また、歴史的な人物を超越した「聖徳太子」という尊格が果たした役割にも注目すべきであろう。なぜなら、日本の仏教定着は節目のたびに新たな聖徳太子像を生み出して深化してきたと言えるからである。

このような日本における仏教受容の諸相が重層したものとして、平安後期の「太子廟崛偈」を挙げるることができる。これは、太子の舎人であった文松子が記録したとされる 20 行の偈文である。そこには、如来の誓願、末法思想、片州意識、太子救世観音、阿弥陀三尊(三骨一廟)、大乘相応、極楽往生、といったこの時代の仏教受容に関する重要な課題を全て取り込みながら一つの説話を形成している。こうした説話は客観的・歴史的な事実とは言えないので、これまであまり研究の対象にはならなかった。しかし、親鸞がこの「太子廟崛偈」に非常に大きな影響を受けたことは事実であるし、こうした説話に全く無縁な同時代の祖師もいる。このような温度差は一体どのような理由によるのであろうか。そうした課題を検討することによって、日本における仏教土着の思想史的特徴の一端が明らかになるとと思われる。

このような意味において、まず「太子廟崛偈」を取り上げ、内容を吟味して、そこに至る日本仏教の受容・展開の諸課題を整理する。次にこうした視点から見た時、鎌倉の祖師たちの思想はどのように理解することができるのか。その思想的特徴の中心を明確にする。つまり、末法思想と三国伝来によって動機付けられた日本仏教は、一体どのような意味において特徴的なのか。その中味とその意義について明かにしたい。